

# イチゴ「まりひめ」栽培に適した追肥技術

～追肥重点型で収量アップ！～

## 1. はじめに

農業試験場では、イチゴの県オリジナル品種「まりひめ」の施肥体系確立に向け検討を行っている。その中で、基肥を控えることで、第2果房の開花、収穫開始が早くなることがわかった（第115号）。

ここでは、追肥量の違いが生育、収量に及ぼす影響を明らかにした。

## 2. 材料および方法

試験区は追肥窒素量（10aあたり）が①6kg、②12kg、③24kgの3区とした。追肥はトミー液肥ブラック（10-4-6）を用い、11月29日～4月26日まで週に2回施用した。1回あたりの窒素施用量（10aあたり）は、それぞれ①0.125、②0.25、③0.5kgとした。

2010年7月15日にポット受けし、7月29日に切り離した苗を、9月21日に定植した。栽植密度は畝幅1.4m、株間22.5cmの2条植え（供試株数30株/区、2反復）とした。基肥窒素量（10aあたり）は6kg（エコロング424-100、有機配合ペレットを各3kg）とした。試験ハウスでは、外張りビニルを10月26日、マルチを11月1日に被覆した。電照は12月24日～1月31日の間、17時～21時に行った（15時間日長）。ハウス加温は朝～夕を最低10～12℃、夜間を最低5℃設定で管理した。

## 3. 結果

厳寒期（2月18日）の株の生育状況は、追肥量24kg区が、6kg区、12kg区に比べて、草丈、葉柄長、小葉長、葉色（SPAD値）が大きかった（表1）。

1～4月の月あたり収量及び総収量は、追肥量が多くなるほど増加した（図1）。

表1 追肥量と厳寒期(2月18日)の株の生育状況

追肥量	草丈 (cm)	葉柄長 (cm)	小葉長 (cm)	小葉幅 (cm)	葉色 (SPAD)
6kg	18.6 ab	12.9	7.7 ab	6.3	52.0 c
12kg	18.1 b	12.9	7.4 b	6.1	53.6 b
24kg	19.7 a	14.0	8.0 a	6.2	55.6 a

注)葉柄長は新生第3葉、小葉長、小葉幅、葉色は新生第3葉の頂小葉を測定。異アルファベットは5%水準で有意差あり(tukey法)。

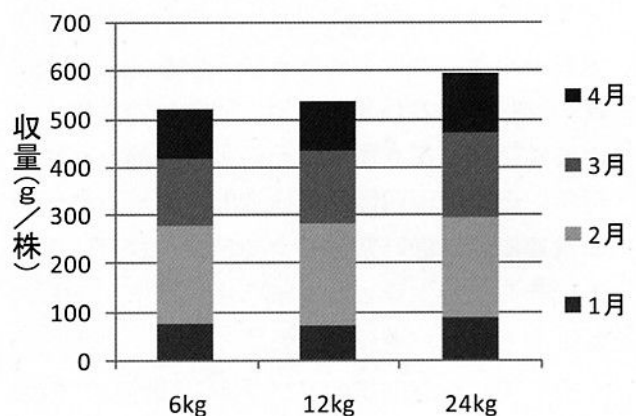


図1 追肥量と時期別収量

注)収量は7g以上果実の合計

## 4. おわりに

以上のように、「まりひめ」は追肥量が多いと厳寒期の株の生育が良好となり、収量が多かった。

このことから、「まりひめ」の施肥体系は、①「基肥を控え（N5～10kg/10a、「さちのか」の1/2～2/3程度）第2果房の分化を促進させ、第1果房と第2果房との収穫の谷間をなくす」、②「追肥を十分に行い、厳寒期の草勢を維持し成り疲れを軽減させ、収量を高める」、追肥重点型とすることが望ましいと考える。

ただし、一度に多量の追肥を行うと、チップバーン等の生理障害が発生するおそれがあるため注意が必要である。

（栽培部 田中寿弥）